


 書評

秋元波留夫 著/上田 敏 構成

99 歳 精神科医の挑戦

好奇心と正義感

山内俊雄

私はこの本を読み終えて、しばし瞑目し、思いに沈んだ。それとともにふつふつとわき上がるある種の高揚感を禁じ得なかった。

この本は、「序章」で語られているように、上田敏東大名誉教授が、秋元波留夫先生に「対談をもとにして本を作る」ことを持ちかけ、「自伝的な」、「元氣な、かがやく高齢者を世に紹介したい」とのおもいから企画、出版されたものである。はじめは、「秋元先生という傑出した高齢者がどうしてつくられたか？」という興味で始まったが、やがて明治、大正、昭和、平成という四つの時代を生きた「個人を超えた“時代”が姿を現わして」きて、当初の予想を超えた深い内容となり、個人の自伝を遙かに超えたものとなった、と上田先生が感想を述べている。

上田先生が指摘するように、「好奇心のかたまり」「正義感のかたまり」「愛情の人」という言葉が我々の知る秋元先生をよく表現している。しかし、そのような、キーワードでは括れない濃い内容が、この本には込められている。

序章(「旅立ち」)に始まり、自分の生き方に連なる父親や母親のこと(「追憶」)、松本一札幌—金沢そして東京と自らの学問の系譜を語り(「自由の大地」)、その折々に遭遇した出来事から得た体験(「人生模様」「大自然の片隅」)や人との出会い(「人間の絆」)についてつづり、「15 年戦争」と称する柳条湖事件に端を発し第二次戦争の終結にいたる 15 年間に被った精神障害者の受難(「勝利なき戦い」)や治安維持法の下で拘禁精神病を発症して死亡した伊藤千代子の話(「忘れじの面影」)、また、精神科医としてかかわった「爾光尊事件」(「未知との遭遇」)や帝銀事件(「間違えられた男」)に関する洞察に満ちた意見、そして精神障害者に対する思いを語った、日本の精神医療に対する厳しい指弾(「生きる情熱」)や「安保闘争」や「大学紛争」についての総括も行われている(「昨日・今日・明日」)。

これらの記述の中から、平素の秋元先生の言動のよってきたところを知ることができる。たとえば、先生の言動の中に貫かれている戦争に反対する姿勢や信念は、憲法の「9 条を守る会」の有力メンバーとして、また「障害者 9 条の会」の設立という形となって現れているが、その背景には、弟の寿恵夫さんのことが影響しており(「昨日・今日・明日」)、伊藤千代子に関する経験や戦争中の精神障害者の受けた理不尽な扱いなど、自らの体験に裏打ちされたものであることを我々は知るのである。

このことからわかるように、我々の目に映る「正義感のかたまり」「愛情の人」の背後には、重い過去の歴史を生き抜いてきた秋元波留夫があることを知るのである。「過去をかえられない。起こらなかったことにするわけにはいかない」というおもいから、一つひとつの事実から目をそらさずに、自分の体験として真摯に受けとめ、自らの思想を作り上げ、そして行動する、その姿に感動を覚えるのである。

この本は秋元波留夫先生個人を知り、理解するにとどまらず、人は体験をどのようにして生きたかに結びつけ、思想を形成すべきかを見事に描き、毎日を一生懸命に生きることの意味と勇気を我々に与えてくれるのである。

この本の内容を示す各章のタイトルを先に記したが、お気づきであろうか。すべて洋画のタイトルをそれぞれの章の表題とし、カバー画には奥様の秋元佑喜画伯の絵が配されている。秋元先生がダンディーで、優しいお人柄であることが、この本のあちこちにあらわれており、ご本人が気持ちよく書けた本と称するゆえんもむべなるかなと思われる、そんな本である。

(埼玉医科大学)

● 四六判 240 頁 2005 定価 1,995 円 (本体 1,900 円 + 税) 岩波書店